

皮膚の炎症を起す恐れがあるので、50%以上の濃度のものは化粧用としては有害である。化粧用としては30%以下を適当とするが、化粧水では5~15%位が多い。アルコールの殺菌作用は55~60%が最高で、30~50位%のローションでは殺菌効果も少し期待できるが、一般の化粧水のアルコール濃度では殺菌作用は問題にならない。グリセリンと併用されている時は、グリセリンのベトベトした感じを和らげる効がある。

アルカリ類は角質溶解作用をもっているが、薄い水溶液(化粧水)としては角質軟化作用を表わす程度である。これを皮膚に塗れば、角質層を軟化させ、グリセリン、水の角質層浸透性を強める効がある。また皮膚分泌物の酸性を中和する作用があり、そのため汗、皮膚などの臭気の一因である有機酸の酸性を中和し、これを抑える効果もある。

アルカリとしてはホウ砂、炭酸カリウム、水酸化カリウムなどが多く用いられる。ホウ砂がその作用もっとも緩和である。近年はトリエタノールアミンなどの有機アルカリが賞用される。これは更に一層刺激性が少なくて、角質浸透性がより強いといわれ、弱い皮膚にも安全だとされている。

処方例

(1) ヘルツ水

水酸化カリウム	0.5%	蒸留水	54.5%
グリセリン	20 "	香料	適宜
アルコール	25 "		

これは手のヒビや荒れ止めに適当である。顔の化粧水としてはベトベトし過ぎて好まれない。

(2) ホウ砂	3%	水	70%
グリセリン	12 "	香料, 色素	適宜
アルコール	15 "		

(3) 炭酸カリウム	0.8%	水	78.2%
グリセリン	10 "	香料, 色素	適宜
アルコール	12 "		

(4) トリエタノールアミン	0.5%	水	65%
----------------	------	---	-----

グリセリン	4%	香料, 色素	0.5%
アルコール	30 "		

トリエタノールアミンは0.5~2%まで用いてもよいが、0.5~1%のものがよい。

香料は成るべく水溶性のものが望ましい。アルカリによって変化するものではない。着香に際して混濁すれば、タルクか炭酸マグネシウムを加えて、振りまぜて濾過して澄明にする。また沈降炭酸カルシウムに香料を混合吸着させておき、これを加えて3~4日放置し、その間、時折振りまぜる。静置後濾過して澄明にする。

着色料も水溶性で、アルカリによって変化しないものを選びねばならない。

赤色：ボンソー 3R (赤1号), アマランス (赤2号), エリスロジン (赤3号), ボンソー SX (赤4号), ボンソー R (赤101号), ニューコクシン (赤102号), エオジン (赤103号), フロキシシ (赤104号)

青色：プリリアントブルー FCF (青1号), インジゴカーミン (青2号)

黄色：ナフトールエロー S (黄1号), タートラジン (黄4号), サンセットエロー FCF (黄5号)

II. 酸性で収レン性の化粧水

いわゆるスキントニックやアストリンゼントなどがこれに属する。スキントニック Skin tonic (皮膚強壯剤の意)と云う名称は、現在の米国の F.D.C. 法では不適當だとされ、Skin Freshner, Skin Bracer と呼ばれることになっている。

これらの化粧水は脂性の皮膚に好適であり、洗面後の手当、化粧下として、また男子のヒゲソリ後の手当料として適当である。アストリンゼントは近年わが国では急に使用が増えつつある。

これらは水、アルコールと香料に、緩和な収レン剤を配したもので、グリセリンを含むものと、含まないものがある。

緩和な収レン剤としてはホウ酸、有機酸、亜鉛やアルミニウムの塩類など